

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 年度～2012 年度

課題番号：22520735

研究課題名（和文） 多数決による産婆選択の慣習と王権による統合

研究課題名（英文） Custom of a Midwife Election by Majority Vote par the Parish Women and the Integration by the Royal Sovereignty

 研究代表者 長谷川まゆ帆（HASEGAWA MAYUHO）  
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
 研究者番号：60192697

## 研究成果の概要（和文）：

この研究課題のねらいは、アルザス・ロレーヌの国境地帯に 17～18 世紀に存在したという慣習「産婆を教区の女たちの多数決によって選ぶ」をとりあげ、この時代に王権による助産婦の確立/養成の投げかけた波紋とその現象の意味を、ミクロな社会分析を通じて解き明かすことにあった。研究成果としては、これまでの研究蓄積を踏まえて、問題の所在を明らかにし、この研究を一つのモノグラフとしてまとめ上げるための包括的な枠組みを構築しえたことにある。

## 研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to struggle to solve the enigma about the custom, by which it is said that the parish women have elected their midwife, in Alsace and Lorraine of the 17<sup>th</sup> and 18<sup>th</sup> Centuries. I analysed in detail the process of the conflicts in the village concerned with the midwives' election and argued the meaning of the establishment of the parish midwife and the election, in the process of the state formation and the integration of the frontier under the Royaume. One of the most important results of this study is that I could rethink and construct the comprehensive frame for writing a book based on these accumulation as a monograph.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

 キーワード：近世フランス史、アルザス、ロレーヌ、国家、身体、女性、出産、助産、外科医、  
 産科医、助産婦

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点となっているのは、王権によるアルザスでの助産婦養成事業を契機とする教区内の紛争に関する研究（①長谷川まゆ帆単著論文「権力・民衆・産婆——18 世紀

後半アルザスの場合——」『思想』NO.843,1986）や、ロレーヌでの 18 世紀初頭の類似した紛争を扱った研究（②長谷川まゆ帆単著論文「多数決による産婆選択と慣習の形成『制度としての女』共著、平凡社、1991

年、③「バロック期のジェンダーと身体」『岩波講座 世界歴史 16』岩波書店、1999年、④「地方長官と助産婦講習会」『歴史的ヨーロッパの政治社会』（山川出版社、2008年）等々の一連の個別論文である。紛争の経緯そのものについては、①②により、これまでも直接関係する裁判史料等を通じて可能な限り分析を進めてきていた。しかしながら紛争そのものの史料は数量に限られており、またそこからわかることは、表層的な出来事のレベルに留まっていた。

このアルザスとロレーヌの紛争事例には、互いにたいへん似た経緯がみられ、とくに展開の仕方においては、ほぼ同じ動き、対応がみられることが確認できる。しかしながらそれぞれは固有の背景をもち、歴史的な脈も大きく異なっている。したがってこれらの現象をばらばらに並べて比較するだけでは、そのもちえた意味を十分に解き明かすことはできない。それらの間をつなぐ空間的、時間的な関係を探り、より広い大きな文脈の中に位置づけて掘り下げ論じていくことが求められていた。そのためには、まずこの時代の助産の実態を時間の中で明らかにすることが不可欠であった。また一方では、「多数決による選択」という選択の原理そのものの歴史的な位置、この時期のフランスにおける法制度の性格や実態、フランス近世期の国家や国境地域の政治的、行政的諸関係を広く調査し、紛争事件を時間と空間の交差する歴史的な視野の中に位置づけて、分析し直すことが必要とされていた。

とはいえ、それはそれほど簡単なことではなかないと予想していた。というのも時間的にも遡り、また同時代の横の関係をより広く理解し、これらの紛争事件の一件ばらばらに見える現象の背後を探って問題をとらえ直すには、さらに多くの予備的考察と探査が必要だったからである。実際、この紛争事件にひそむ謎はあまりに大きく、不可解な点も多いのであり、それゆえこれらの謎を解いていくには、それなりのまとまった時間と調査の機会を必要としていた。

具体的には、17世紀以降徐々に進展していった臨床医学の歴史を王権や学者集団の内部の関係に注目して明らかにすることであり、また古代ローマ法に起源をもち、中世期、近世期に受け継がれ、活用され、領有されていった「多数決」という原理そのものの歴史を掘り下げ、法制度の歴史を十分に踏まえて、18世紀のフランスでの法制度史の実態ともすり合わせて実態を理解していくことである。さらに、紛争事件の中心事例の一つであるサン・タマラン溪谷の社会政治的、経済的状況についても、これまで主要な探査を怠ってきたこともあり、十分な探査を必要としていた。とくに中世に創設され繁栄しながらも近世期には衰退しつつあったミュルバック Murbach の修道院の歴史を明らかにし、18世紀にその修道院領の一部であった溪谷の領主・農民関係をミクロにとらえ直していく作業が残されていたのである。

結局のところ、この研究課題の開始当初に

おいては、近世期の助産そのものの実態を十分に詳らかにしながら、またこうした法制度や地域社会の内部に進行していた村落関係の変化などを、多様な文献に基づいてひとつひとつ紐解き理解しながら、紛争事件との有機的な関係を考察していく作業が依然として残されていたのである。

したがって本研究の開始当初は、まずは当時の助産の実態を考えることをめざし、すでに単著として発表していた『お産椅子への旅』（岩波書店、2004年）をもとに、それとの関係で浮上したコタンタンの外科医モケ・ド・ラ・モットの助産について、当時の内科医と外科医の確執、王権との関わり、お産の現場でいかなる助産が行われていたかを明らかにすることに力を注いだ。

研究開始からまもなくであるが、このモケ・ド・ラ・モット（1655-1737）の生涯と助産については『さしのべる手』（岩波書店、2011年）としてまとめ出版することができ、これによって、18世紀の初頭までの助産実践の実態をある程度鮮明に把握することができた。ただし、この書籍は、モケ・ド・ラ・モットの生涯を論ずことに限定されていたため、本研究課題の主題である紛争事件との関係については、さらに18世紀後半にどのような助産がなされていたかを改めて考察することが必要であり、課題として残されていた。

それゆえ研究開始当初にまず取り組んだのは、アルザスに関しては、サン・タマラン溪谷に当時あった領主/農民関係、アルザスに特有の王権行政の在り方、多数決原理の歴史の解明であり、18世紀末の溪谷に存在した産業上の変化などの調査である。またロレーヌの事例について言えば、たとえば18世紀初頭にレオポールが下した判決が多数決原理との関わり、ローマ法との関係でいかなる意味をもち得たか、またカトリックの司牧の代理として誓約を行った助産婦の実際の助産が、当時の儀礼や風習などどのように関わっていたか、洗礼ひとつをとっても彼らの宗教意識とそれがどのように関わり合っていたかと言う点など、掘り下げるべきポイント、論点が明らかになっていた。これらはみな、それまでの研究でも着手されながらも、十分探査しつくされていなかった点でもある。

こうして研究開始当初から、王権による秩序形成の問題、東部国境地域の独特な政治文化の状況を解明する作業が必要であることが、ある程度見え始めていたのであるが、これを密度の濃い分析によって考察し、まとめあげていくに、さらなる現地調査と文献史料に基づいた省察、全体像と関連付けながらの執筆作業が必要とされていた。

## 2. 研究の目的

本研究の代表者である長谷川まゆ帆は、1984年に発表した論文（「女・男・子どもの関係史——女性史研究の発展的解消」『思想』NO.719（岩波書店、1984年））の中でも触れているように、歴史を人間一般の過去としてみ

るのではなく、女と男と子どもが生きる総体として分節化しつつとらえることを重要と考え、以来こうした関係性の達成を念頭に研究を続けてきた。またそのパースペクティブには、政治史や経済史にのみ終始しがちな歴史学の視座、枠組みを柔軟に開いていくことが内包されており、それによって歴史叙述を多元化していくことが企図されていた。たとえば、出産や死といった日常性の中にある諸問題、それに関連する諸秩序と密接に関わる場から問いを立て、とりわけ身体にかかわる問題にもあえて光をあてながら、歴史の深層へと降りていくことをめざしてきた。

それはまた、人間をとらえる方法や視座を広げ、社会秩序や国家についての理解を創造的に組みかえていくことでもあり、ヨーロッパ史像そのものを再考していくことをめざすものでもある。換言すれば、研究代表者の基本的な研究目的は、われわれの歴史認識や人間観を問い直し、歴史叙述のかたちを多元化していくことであるといっても過言ではない。歴史を国境線によって分断して狭く考えるのではなく、現実の人間の営み、日々の生きた人と人との関係、男と女と子どもの関係性を出発点としつつ、そこからより普遍的な全体へと至ろうと模索することである。こうした研究目的と研究姿勢は、本研究課題の中でも貫かれている。

その際のひとつの方法として研究代表者が重視しているのは、人類学的な視座や観点を導入することである。歴史研究者は過去の社会に直接足を運ぶことはできないにしても、研究者自身が対象としている地域に実際に足を運び、現地の自然環境を感じ取ったり、残存する「もの」や「こと」に触れて、場合によっては手に触れ、身をもって体験することが不可欠であり、今生きている人たちとも交流しながら、現在を生きる人間たちへの想像力を養うことが必要である。それは研究者自身の認識を広め、想像力を養うことであり、そこからこそ文献記述についてのより包括的な理解も可能になるからである。文献がさし示していることは、過去のほんのわずかな痕跡にすぎない。化石となった記号と言っても過言ではない。それゆえ本研究課題においても、可能な限り現地に赴き、文書館、図書館とともに対象地域に身をおくことを心掛けてきた。

さらにもう一つ触れておきたいのは、方法として、女性の身体を問題にすることである。しかし、これは必ずしも女性の問題には限定されない。出産や人間の生き死には共同体や社会の存続の問題であり、また人類史につながる普遍的な問題でもある。身体を扱うことは、単なる女性史を超えて、人間存在の意味を問い直すことにつながり、人類史に普遍的な問題を考えることでもある。本研究課題で

はたしかに、地方長官の残した意見書や、行政上、裁判上の史料が多数活用されており、既存の歴史学の方法論を踏まえたものになっているが、身体性の問題が通奏低音としてながれているのであり、身体性の歴史学のための予備的作業である。軸はあくまでそうした身体性の問題を政治文化との関連の中で問いなおしていくことにあった。

### 3. 研究の方法

身体性を深く見極める上で当初取り組んでいたのは、モケ・ド・ラ・モットのよう豊富な実践記録を残した外科医や、エッケのように内科医でありながら外科医の営みに真っ向から批判を展開した人物の残した書籍や冊子であった。彼らの書き残した叙述や論争を読み解くことで、身体への関わりや認識もそこから考察することができると考えた。その方法的な基盤は、あくまで文献記録にあり、研究は、可能な限り実証的であることをめざすものであったし、身体の問題をどこまでこうした方法で論ずることができるかを考える実験的な試みでもあった。

一方、本研究課題では、アルザスやロレーヌといった東部地域に18世紀に頻発した紛争事件を扱っている。この時代に残された文献史料を用いて、これを手がかりにミクロな農村社会の実態に降りていくが、一方では可能な限り関連地域に実際に足を運び、現在の痕跡、直接的な体験を通じて過去への想像力を養うことにも力を注いできた。すなわち文献だけでは十分にわからない土地勘や環境への理解を深め、文献史料の行間を埋めていく作業を意識的に行おうとしたのである。過去の紛争を対象にしてはいるが、残存する遺物やものから人類学的な体験を経ることで、文献史料の捉え方を問いなおそうとしてきたのである。それによって文献と非文献、「ことば」と「もの」、文字と身体の間で少し降り立ち、架橋できるのではないかと考えた。

### 4. 研究成果

まずは、2011年度にコタンタンの産科医に関する研究書を上梓した。この時代の助産がいかなるものであったかを問い、詳細に考察する上で重要な成果となった。すでに出版していた『お産椅子の歴史』(2004年)と合わせて、17世紀および18世紀前半までの内科医と外科医の確執、差異、王権との関わり方などを一層明瞭に明らかにし論ずることができた。また助産の内容についても、これまでわからなかった体内洗礼の問題を助産実践の現場からとらえることができた。

本研究課題では、こうした研究成果をもとに、さらに18世紀後半のアルザスでの助産実態を明確にすることが課題として残されており、これについては18世紀半ばの外科

医アンドレ・ルヴレ等の残した産科学の学術書がその大きな手掛かりとるため、これを手し、目下その叙述を分析中である。

一方、教区の女たちによる産婆の「多数決による選択」という慣習については、多数決原理の歴史との比較考察を必要としたため、ゴドメらの法の歴史についてまずは基本を学び、古代ローマ法と近世期のフランス法学の法学者らの関わりを調査するとともに、この時期に実際にどのような法秩序の構築がめざされ、それが農村でどのように受容され実践されていたかを考察した、その際、シャンパーニュ地方のノ・ジャン・シュル・セーヌでの村代表 syndic 選出をめぐる紛争は、多数決による任命が必ずしも絶対的な説得力をもつものではなかったことをさし示しており、また地方長官への嘆願書を送ると言う手続きからみても、この選択原理の農村への浸透が早くから領土となっていた地域でもなお揺れ動いていたことを知る手掛かりとなった。またこの事例は、アルザスやロレーヌのような辺縁部の地域において言及される「多数決」原理と現実に行われている「多数決」原理との微妙な差異、温度差を照らし出す重要な手がかりともなった。

またミュルバックの修道院はヴォージュ山系の山肌に8世紀にたてられた古い修道院であるが、18世紀にもサン・タマラン溪谷のすべてを荘園として所有する封建領主でもあり、この溪谷住民の生活に密接な関わりをもち続けていた。この修道院の歴史を知ることが不可欠であるが、この修道院領の性格や成り立ち、中世、近世期の実体については、アルザス及びオラン県の学術協会によってなされた詳細な史料研究 (*Recherchs sur la puissance temporelle de l'Abbaye de Murbach*, 1972) があり、少なくとも15世紀までの修道院の発展とその後の衰退を把握することができた。

また溪谷の18世紀の状況については、コルマルの文書館で入手した史料群から見えてくるのが少なくなく、特に18世紀半ばから伸展した溪谷上流のヴェッセルランの王立マニファクチャーの繊維工場との関わりがこの溪谷住民の意識や生活に次第に大きく影響を及ぼしつつあったことが明らかになっていった。この工場は、溪谷の良質な水を利用して行われるプリント繊維の製造工場であり、もともとはインドの伝統的な木版印刷による綿繊維産業をまねて始まったもので、ミュールーズに本拠地をもつ捺染工業の発展と関係があり、この小さな溪谷にも革命以前から国際経済の影響が深く及んでいたことを確認することができた。

これらの長い探究の諸成果は、歴史学研究所のモノグラフとして1冊の書物にまとめ、いずれ出版する予定であり、目下そのために準

備中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) 長谷川まゆ帆「ヘイドン・ホワイトと歴史家たち—時間の中にある歴史叙述」、『思想』1036号、特集号、岩波書店、2010年7月、161-187頁。

(2) 長谷川まゆ帆「多数決による産婆の選択と王権による統治」『日仏歴史学会報』25号、2010年、7-11頁。

(3) 長谷川まゆ帆「教区の女たちが産婆を選ぶ—アンシャン・レジーム期フランスの国家と地位社会」、『歴史学研究』885号、増刊号、2011年、2-11頁。

[学会発表] (計3件)

(1) 長谷川まゆ帆、発表題目「多数決による産婆選択の慣習と王権による統合」、日仏歴史学会年次研究大会(2010年3月27日奈良女子大学)での報告。

(2) 長谷川まゆ帆、発表題目「教区の女たちが産婆を選ぶ—アンシャン・レジーム期フランスの国家と地位社会」、歴史学研究会年次総会全大会(2011年5月青山学院大学)での報告。

(3) 長谷川まゆ帆、報告題目「ある産科医の生涯と手技」、松岡悦子科研研究例会(2011年12月1日、南青山会館)での招待報告。

[図書] (計1件)

(1) 長谷川まゆ帆 (単著)『さしのべる手—モケ・ド・ラ・モットの手技と近代産科医の誕生』岩波書店、2011年7月、328頁。

[その他]

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長谷川まゆ帆 (HASEGAWA MAYUHO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：60192697

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし